

コミュニティソーシャルワーカーの思い

「孤立させないやさしい地域をつくる！」

巻頭インタビュー

社会福祉法人豊中市社会福祉協議会 事務局次長

勝部 麗子さん

社会福祉協議会の活動を取り上げたNHKドラマ「サイレント・プア」のモデルになった豊中市社会福祉協議会（大阪府）の勝部麗子さん。社会的孤立の問題や制度の狭間の問題が深刻化する中、コミュニティソーシャルワーカーとして、地域の中でさまざまな問題を抱えて困っている人に寄り添い、解決してきた勝部さんに、その思いを伺いました。



勝部麗子さんプロフィール
社会福祉士。コミュニティソーシャルワーカー。
1987年 豊中市社会福祉協議会 入職
2004年 大阪府地域福祉支援計画のコミュニティソーシャルワーカー設立事業の一期生となる
2014年 NHKドラマ「サイレント・プア」のモデルとなり、同ドラマの監修を務める

る。そういう仕組みをつくっていきたい一心でした。

「その思いから「コミュニティソーシャルワーカー」としての活動が始まったのでしょうか。」

平成7年の阪神・淡路大震災で、府内最大の被災地になったことを契機に、豊中市では平成8年から、小地域ネットワーク活動の取り組みを始めました。それは、AさんをBさんが見守る、BさんをCさんが見守るということでした。地域の中で組織化するというのです。

一生懸命やり出すうちに、いろんな問題を住民が見つけてくるようになりました。しかし、一生懸命見守っても、解決してくれる人がいない。「これは高齢者分野の問題です」「これは障害者分野の問題です」と言える場合はいいのですが、そうではない問題が出たときに、誰が解決するのか決まっていま

ませんでした。そこで平成16年、地域福祉計画を策定するときに、コミュニティソーシャルワーカーという、制度の狭間の問題を一手に引き受けて、行政や住民と一緒に解決していくというワーカーを配置しようということになりました。

まず、何か困っていても自分でSOSを挙げられない人たちの問題を、地域で見つけていく窓口として「福祉なんでも相談窓口」を作りました。これはボランティアや民生委員・児童委員が住民からの相談を受ける場所です。民家を借りているところ、小学校の空き教室を使っているところ、地区会館を使っているところ、一時はイオンの店舗を借りたこともあります。住民が地域の中でいろんなSOSを発見し、窓口に相談しに来る。そしてその問題をコミュニティソーシャルワーカーが解決していきます。

「全てコミュニティソーシャルワーカーが解決していくのですか。」

もちろん、一人では解決できません。そのため、事前に地域福祉計画に、地域をどのように進めていくか、行政はいくらお金を出すのか、社協はどう関わるのか、あるいは住民はここを協力するなどの役割分担を示しておきます。

行政と住民、それから社会福祉施設が一堂に会する地域福祉ネットワーク会議で課題を共有し、さらに解決できないものについては市の課長級の会議に問題を挙げます。「問題があります」ということは誰でも言



付けをしていると、最後には一番文句を言っていた人も協力して下さることもあります。悪者を作らない支援です。そんなふうにしていくと、誰も排除しない町になってきます。ご近所の中で、いろんな苦しみをちょっと分かってくれる人たちが出てくると、地域はともやさしくなっていくと思います。一番厳しい状況にある人を絶対に見捨てないということをコミュニティソーシャルワーカーがやり続けていると、地域の人たちは安心します。

この間、厚生労働省の方が豊中市にお見えになりました。「なぜ皆さんはそんなに一生懸命、地域のことをやってらっしゃるのか」と住民に問われました。「自分の町だからです。自分の町がこうやってやさしくなっていくということは、自分が困ったときに助けてもらえる町になるからです」と、皆さんお話しされます。コミュニティソーシャルワーカーと

えます。そして「こういうやり方だったら、解決が一步進むんじゃないか」ということを、行政と話し合い、提案していきます。この仕組みで、豊中市では平成16年から10年間に約35のプロジェクトが挙げられました。

いろんな問題を解決して、セーフティネットを豊かにしていく。これは、議会に提案するような問題だけではないです。例えば、住民の人たちが協力する、あるいは集いをつくるなど、いろんな形の支える仕組みがあります。

「今まで具体的に、どのような問題を解決されてきたのですか。」

ゴミ屋敷の問題は、もう300件近く支援をしてきました。それを住民と一緒に片付けてきました。しかし、社会的孤立の象徴であるゴミ屋敷の問題



というのは、誰か一人を助けるというのも大事な仕事ですが、その人を支える地域、地域に理解を求め、心を寄せてくれる人たちが、やさしいまなざしの人をたくさんつくるということもとても重要です。

「コミュニティソーシャルワーカーとして、勝部さんが心がけていることは何ですか。」

社会的排除をさせない。これは、私たちがその態度をずっと取り続けていると、住民たちは「これくらいのこと、やってもいいんだな」と思ってしまう。絶対排除してはいけないと言いつつ支えています。支援を広げて、同じ問題を抱えている人を横につないでいく、一人ぼっちにしない、社会資源につなぐ、なければ生み出す。ネットワークとフットワーク、そして、あきらめない心。こんなことを思いながら、みんなで活動をしています。

「最後に、勝部さんが思う「社協が果たす役割」とは何でしょうか。」

やっぱり、社協にしかできないことって何だろうと思つたとき「社会的孤立」の問題を解決することだと思えます。「制度の狭間」というのは昔からありました。急に今、増えているわけではないんです。狭間はあつたけど、

「コミュニティソーシャルワーカー」とは

地域で暮らす個人や、またその家族が抱える生活上の課題に対し、個別の支援をするともに、それらの人々が暮らす環境の整備や住民の組織化とといった地域支援を、チームアプローチで統合的に取り組む人材です。豊中市社協では、コミュニティソーシャルワーカーが「制度の狭間の問題」を公民協働で解決しています。

「勝部さんの現在の活動のきっかけを教えてください。」

住民主体という言葉に憧れ、自分の生まれた町の豊中市社協に就職しました。法人化も昭和58年と最も遅く、当時は口の悪い人に「寝たきり社協」と言われ、ものすごくショックでした。専任職員は4人しかおらず、社協の存在もあまり知られていない状態でした。とにかく、いろんな人たちの相談で溢れる社協にしたいということ、社協を通じて地域活動に関わる人がたくさんいる町にしたいという思いでした。

地域の人たちから相談を受け、その時には解決できなくても、同じような問題が起きた時に、次は絶対に解決す

は家を片付けても解決しません。淋しいということを解決しない限りは、何も変わらないのです。片付けを通じて、その人の人生観も一緒に感じます。

「どうして、こういうものを買っているのだろうか」とか「着物がたくさんあるから、昔はこういう生活をしてきたのかな」ということを、一緒に片付けをしなご話をしながら、その人の人生を一緒に聞きます。そして、そのことを分かった上で、彼女は今、ゴミ屋敷の人だけ、その前はゴミ屋敷の人ではなかった人生があったはずだということに共感し、尊重します。

「皆さん、初めから片付けに協力してくださいましたか。」

いいえ、住民と一緒に片付けると言っても、簡単なことではありません。困った人がいると、その人を排除する

それを埋めていたのは、家族や、地域だったのです。それらの力が弱まっているから、今、狭間は問題として浮き彫りになるのです。人とのつながりをつくる、地域づくりをしていく。これを自然に任せていてももうできない、ということにみんなが気が出しました。

命を守るのは、人・地域とのつながりです。いろいろなことを助けてと言えるSOSが出せる社会にしていくということがやっぱりとても重要で、それを作っていくのが社会福祉協議会の役割です。みんなが力を合せて、いろいろな課題を発見するということが、解決するというを一緒にやっていくのが、オール社協だと思います。



セーフティネット
「コミュニティソーシャルワーカーの現場」

（原文文／豊中市社会福祉協議会）

マンガ／ボリン

引きこもりの方々の就労支援にて、集まった青年たちが漫画を作成。これがNHKの目に留まり、「サイレント・プア」のドラマにつながりました。